

# 鈴木信太郎記念館だより

## 第14号

### 令和7年度展示「パリの信太郎 en 1925 - 100年前の留学事情 -」 記念講演会

当館で令和7年4月から本年4月まで開催している令和7年度コーナー展示「パリの信太郎 en 1925 - 100年前の留学事情 -」を記念し、全2回の連続講演会を開催しました。今回はこの講演会の内容をご紹介します。

#### 【第1回講演会】

- ・日時：9月21日(日) 14:00-15:30
- ・講師：<sup>かやのき</sup>栢木まどか氏 東京理科大学工学部建築学科 准教授
- ・題目：「鈴木信太郎記念館の書斎棟を考える～戦前期における鉄筋コンクリート造建築～」

栢木准教授の講演では、明治時代以後の日本で、不燃・耐震構造として鉄筋コンクリート造の建築が急速に導入された事例や、関東大震災以後の「復興建築」として公共建築で鉄筋コンクリートが採用された多数の事例をご紹介いただきました。また、震災以前から、倉庫や個人宅の蔵等にも用いられていた例を紹介していただいた上で、鈴木信太郎邸の鉄筋コンクリート造の書斎棟は、当時の建築技術の発展に即して最適な建材を選択し、太平洋戦争の空襲から蔵書を守った点に大きな意義があることを解説していただきました。



栢木准教授による講演の様子

#### 【第2回講演会】

- ・日時：9月28日(日) 14:00-15:30
- ・講師：<sup>こせきたけし</sup>小関武史氏 一橋大学大学院言語社会研究科 教授
- ・題目：「信太郎が観たモリエール～日記に綴られた百年前の観劇体験～」

小関教授の講演では、信太郎がパリ滞在中に連日のように観劇していた演劇作品のうち、最も頻繁に観ていたモリエールの作品について、信太郎の日記の記述を読み解いていただきました。信太郎が俳優の演技方や役柄の解釈の仕方を重視し、脚本の内容についても独自の審美眼で良し悪しを評価していたこと、同じ役でも俳優たちの演技の違いを楽しみ、俳優に対する好き嫌いがはっきりしているが、観ているうちに評価が変わった俳優もいることが分かるなど、日記の記述の詳細な分析によって見えてくる信太郎の姿を解説していただきました。また、当時の劇場の座席の様子や信太郎の金銭感覚などもご紹介いただきました。



小関教授による講演の様子

いずれの講演にも、説明が非常に分かりやすかった、次回以降の開催にも期待するとのご感想をいただきました。

# シンポジウム「鈴木信太郎の青春 フランス文学との出会い ～東京帝国大学在学中の受講ノートより～」の開催

令和7(2025)年12月6日(土)、公益財団法人としま未来文化財団、京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター、鈴木信太郎記念館の3者共催によるシンポジウムを開催しました。このシンポジウムは、当館が所蔵する鈴木信太郎の大学時代の講義受講ノートのデジタル画像化・翻刻を、京都大学人文科学研究所との共同研究として行ったことをきっかけに、これまでに翻刻した3冊のノートの分析から分かった内容を地域住民の皆様にご報告する機会として開催したものです。

冒頭、研究を主導された京都大学人文科学研究所所長の森本淳生教授<sup>もりもとあつお</sup>から、今回のシンポジウムの趣旨や意義をご説明いただいた後、当館学芸研究員から、鈴木信太郎の生涯と記念館開館の経緯等についてご紹介しました。

続いて、3人の先生方から、ノートの分析から判明した内容について報告がありました。1人目の学谷亮<sup>がくとりにょう</sup>・中央大学文学部准教授からは、「鈴木信太郎とフランス・ロマン主義文学－講義ノート「文学史概説Ⅲ」をめぐって」と題して、このノートはフランス人講師エミール・エックが述べた内容を信太郎が聴き取って書き留めたものと考えられること、エックがロマン主義の作家たちに対する評価や価値判断を下して学生に提示していたのが分かること、18世紀の文学を低く評価する一方、19世紀の文学を賞賛するエックの文学史観が反映されていることなどをご説明いただきました。

2人目の藤貫裕<sup>ふじぬきゆう</sup>・京都大学大学院文学研究科研究員からは、「日本美学史の観点から紐解く信太郎の受講ノート「最近欧州文芸史」と題して、『最近欧州文芸史』のノートは美学者・大塚保治(1869-1931)の講義内容を記したもので、この講義は信太郎がフランス文学以外でほぼ唯一受講した授業と見られること、講義内容はオスカー・ワイルドの生涯や作品評価を中心に据え、ワイルドとポール・ヴェルレーヌ、シャルル・ボードレール、エドガー・アラン・ポーなどが比較されて論じられていることなどをご解説いただきました。

3人目の菅原百合絵<sup>すがわらゆりえ</sup>・京都大学人文科学研究所准教授からは、「鈴木信太郎と啓蒙の世紀－『ジャン＝ジャック・ルソー』講義録ノートより」と題して、ルソーが活動した18世紀の時代背景や、講義を行った講師エックが18世紀を「墮落の時代」と見なしていた点をご説明いただいた後、ノートの記述から見えるエックのルソー評価について、概ね批判的な評価を下している一方、特に作品の文体やルソー自身の人格については好意的に評価している部分もあると分かったこと等をご報告いただきました。

その後のパネルディスカッションでは、慶応義塾大学法学部の大出敦教授<sup>おおであつし</sup>にコメンテーターを務めていただき、今回の研究で判明した内容の重要性やノート研究の意義、今後研究を発展させていくべき方向性などについて、出席者のご質問にも答えつつ、登壇者全員で意見を交わしました。

今回翻刻されたノートは、今後、京都大学人文科学研究所のウェブサイトで公開され、誰でも閲覧できるようになる予定です。公開の時期については、当館からもホームページやX等を通じて皆様にお知らせしていきます。また、今後も共同研究を続け、その成果を皆様にご報告する機会を設けていきたいと考えています。



森本教授による趣旨説明



全員でのパネルディスカッション

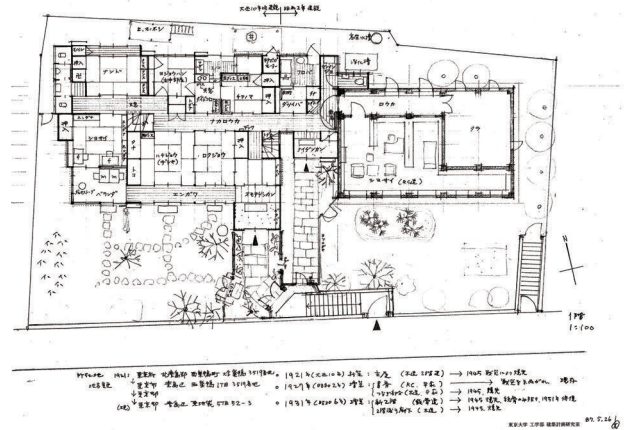
(奥村 景子)

## 「迎え」のかたち 玄関ホール

当館の玄関ホールに足を踏み入ると、簡素でありながら開放感のある空間が広がります。この玄関ホールは、終戦後の昭和21(1946)年に設けられたもので、大正7(1918)年に鈴木家が神田からこの地に移り住んで以降、時代とともに姿を変えてきた住宅の歴史を今に伝えています。

信太郎の父・<sup>まさじろう</sup>政次郎によって大正10年に建てられた木造二階建ての母屋には、南側に主玄関、東側に内玄関、北側に女中や商人が使用する勝手口が設けられ、生活動線が整えられていました。政次郎の没後、昭和3年には、信太郎によって母屋の東側に鉄筋コンクリート造の書斎棟が増築され、母屋の浴室や便所に加えて南向きの内玄関も新たに造り変えられました。

信太郎の長男で建築学者の<sup>しげぶみ</sup>成文が、記憶を頼って書き残した戦前期の配置図では当時の様子を知ることができます。



図：昭和戦前期配置図の1階部分、当館茶の間にて展示中

信太郎の客人は応接セットが置かれた書斎に通されました。書斎は学問の場であると同時に知的交流のサロンでもあり、家族の生活空間とは明確に区切られていました。その後、戦災により木造母屋は焼失。信太郎夫妻と子どもたちは、唯一焼失を免れた書斎棟で生活せざるを得なくなります。書斎内に敷いた畳の上で寝食をするなど、書斎は家族の生活の場を担うようになったのです。ただ、信太郎は「元来が書庫だから、台所も便所もない。出入口は窓と縁の下の抜穴である。甚だ不便のやうであるが、馴れて来ると、過去の生活よりも一層本質的である。」と記しており、一概に不便とは捉えていなかったようです。

とはいえ、学問と生活の境界を再び整えたいという思いも芽生えていたと思われ、昭和21年、当時15坪以上の新・増・改築を禁止する「臨時建築制限令」という制約がある中で、信太郎は台所、茶の間、トイレ、洗面所、浴室、玄関ホールを設けた「茶の間・ホール棟」を竣工させました。ここで注目したいのは、あえて玄関ホールに余裕を持たせた造りが施され、応接の場として使われたことです。大正期以降の和洋折衷住宅でも見られる形式ではありますが、この選択は、<sup>うかが</sup>来客を迎えるという行為に重きを置いた、信太郎の意志の表れだったことが窺えます。

さらに昭和23年、<sup>しもぎつ ま</sup>埼玉県下吉妻(現春日部市)の鈴木本家から書院座敷を移築した際には、家族専用の内玄関が新たに設けられ、家族との動線が分けられました。これにより、信太郎と客人が使用する玄関ホールを表玄関とした「迎え」の空間が完成したのです。信太郎の次男で仏文学者の道彦は、「家族のなかで彼だけは常に表玄関から出入りした。しかもそのたびに、家中の者が総出で送り迎えをしなくてはならなかった。」<sup>2</sup>と回想しています。

一方、信太郎は随筆で、「呼びりんを押して家内を部屋に呼んで、用事を命ずるといふ旧来の習慣は、息子共が生れる前からやっていた方法だが、彼等には何となくおやじ横暴と感ずるらしい。」<sup>3</sup>と述べ、時代の変化に伴う家庭内の微妙な心境もつづっています。

玄関ホールという「迎え」の場は、単なる出入りの機能以上に、変わりゆく家族像や時代と向き合いながらも、自身の生活と学問の構えを守りたいという信太郎の思索が、静かに息づく場所なのです。

(徳力まもり)



現在の玄関ホール  
(2026年2月筆者撮影)

【註】 1. 鈴木信太郎「本の疎開」『東京新聞』1945年7月20日号、2面 / 2. 鈴木道彦『フランス文学者の誕生』筑摩書房、2014年、p.220 /

3. 鈴木信太郎「親子三代の嫁たち」『朝日新聞』1960年6月19日号、夕刊2面

【参考文献】 旧鈴木家住宅調査団『旧鈴木家住宅調査報告書』2011年

## 令和7年度事業報告

### 秋の特別公開 酒井道一《秋草鶉図》掛軸原本初公開

当館座敷棟にて、鈴木信太郎の旧蔵美術品、酒井道一《秋草鶉図》掛軸原本を11月1日(土)から9日(日)[4日(火)、8日(土)は除く]にかけて期間限定で初公開しました。

本作は、信太郎の父・政次郎が明治後期から大正期にかけて、芸術家たちの支援をしていたことから、その交流の中で鈴木家に伝わる作品の一つです。

画中には秋の七草が彩り豊かに描かれ、秋の季語として知られる朝顔には鮮やかな群青、<sup>くんじよ</sup>葉脈には金泥が施され、洗練された装飾美を生み出しています。また、鶉の羽根の描き込みも緻密で、道一の画技の高さが窺えます。保存状態も良好なため、制作当時の鮮やかな色彩や筆致が保たれています。江戸琳派ならではの優美な作品を、ご来館の皆さまに間近でご鑑賞いただく貴重な機会となりました。



展示会場風景



酒井道一《秋草鶉図》絹本一幅  
慶応2-大正2(1866-1913)年

### 令和8年度「信太郎の愛蔵書」コーナー 展示替えの予定

本年4月、当館書斎内の「信太郎の愛蔵書」コーナーの展示替えを行い、「信太郎と美術」に関する展示を行う予定です。信太郎は文学者ですが、多くの美術関係者とも親交がありました。幼馴染の高島達四郎をはじめとする画家たちが、書籍の装幀を手掛けるなどの形で、信太郎の業績に深く関与した事例も見られます。

また、信太郎は、文学作品だけでなく、美術作品に関しても独自の審美眼を持っており、西洋・東洋美術を問わず、日本で開催された多くの美術展覧会に足を運びました。当館では信太郎が蒐集していた展覧会図録なども多数所蔵しています。

今回の展示では、このような信太郎と同時代の美術の関わりについてご紹介する予定です。通常、複製を展示している高島達四郎の《プチ・ジャンの肖像》、須田国太郎の《鷲図》などについては、期間限定で原画を展示する予定です。原画の展示期間は今後当館ホームページや郷土資料館Xなどでお知らせしていきますので、ご確認ください。

なお、展示替えに伴い、下記の期間は臨時休館となる予定です。ご迷惑をおかけしますが、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

臨時休館期間：令和8(2026)年4月17日(金)～24日(金)(予定)



高島達四郎《プチ・ジャンの肖像》  
油彩・カンヴァス、昭和3(1928)年頃

#### 鈴木信太郎記念館だより 第14号

発行日 2026年3月19日

発行 豊島区

編集 豊島区立鈴木信太郎記念館

〒170-0013 東京都豊島区東池袋5-52-3

TEL: 03-5950-1737

<https://www.city.toshima.lg.jp/129/bunka/bunka/shiryokan/suzuki/suzuki.html>



SUSTAINABLE  
DEVELOPMENT  
GOALS